

江戸時代の商業活動の発展と 商人の合理的精神（Ⅰ）

古 谷 正 勝
椎 名 市 郎

〈目 次〉 はじめに

- 1 江戸時代の商業活動の発展（その1）
 - (1) 兵農分離と江戸時代
 - ①土地改革と太閤検地
 - ②「小農」の自立と商品流通
 - ③武士団の都市在住と消費集団の創出
 - (2) 近世前期の開発と商品流通の展開
 - ①近世前期の開発の概要
 - ②鉱山開発と貨幣の鑄造
- 2 江戸時代における商人の合理的精神（その1）
 - (1) 近代国家日本を支えた江戸時代
 - (2) 商人の合理的精神へのアプローチ
 - (3) 江戸時代の商人像
 - ①商人像の時代区分
 - ②合理的経済認識の形成
 - ③封建体制下での特殊な商人階層と儒教

（以上、本号所収）

はじめに

中世社会の内部でゆるやかな発展をみた農業・商業・貨幣経済は、下剋上の到来により、戦国大名の経済的基盤としてその発展しつつあった経済的諸関係は領国経営に取り入れられ、中世末の社会経済的発展をみた。下剋上を清算すべく天下統一の政治経済過程で、この戦国大名下の地方分権的領国経済は徐々に否定され、中央集権的国民経済を押し進め、とりわけ大閥検地以降、兵農分離の過程は、古代・中世社会の経済と経済にかかわる制度面は否定され、武家が政権を奪取している社会でありながら、中世社会とは明確に区分できうるほどの近世的領主制の江戸社会が生まれ、新たな歴史を展開していくようになった。

17世紀の初頭から130年後の1730年には、人口が約3,208万人となり約2.7倍増加し、元禄期には江戸の人口約100万人で、当時にあつては世界最大の消費都市に成長した。平野部の開発が海側に向かって進められ、耕地面積も約1.4倍拡大し、中世の「山間部」的社会経済から脱皮していった。

中世の輸入貨幣である「渡来銭」に代わって、徳川政権の統一権力のなかで貨幣鑄造権は握られ、豊富な金・銀・銅を素材に「三貨」が鑄造され、商品経済を一層促進した。交通の整備がなされ海運では、北前船や弁才船が日本の近海をあたかも「ベルトコンベアー」のごとく廻船し、大型輸送を展開した。木綿による「衣料革命」が起こり、江戸人の生活の質も確実に上昇した。江戸時代の経済が自給自足的、自然環境的な面から一定の制約があつたとしても、それが各地の特産物となり、地方市場と中央市場を有機的に結びつけ、商品化させた。

商品経済の発展にともない商工農の経営面でも識字力は必要不可欠となり、寺子屋の繁盛のなかで庶民教育が活性化し、識字率が急上昇した。

ヨーロッパで誕生したような「経済学」は生誕しなかったが「経済政策論」が太宰春台等によって展開され、経験科学に基づく農学などの実学書も盛んに刊行されて、合理的精神に裏付けられた「経済社会」が進行していった。

本稿では、このような江戸時代の商品経済の発展・特徴を論究し、合理的経

済思想の形成と商人の革新的経営思想を「帳合法」をとおして帳簿・経営管理の面から考察する。

1 江戸時代の商業活動の発展（その1）

(1) 兵農分離と江戸時代

①土地改革と太閤検地

646（大化2）年「大化改新の詔」によって、「はじめて戸籍・計帳・班田収授之法を造⁽¹⁾り」「五十戸を一里とし、里ごとに長をおき」「町段歩の丈量単位を定め一段から二束二把（全収穫の100分の3）の田租⁽²⁾」を徴収するようになった律令制社会と「班田収授法」のように、また明治維新の藩籍奉還後、岩倉具視遣外使節団の留守役、西郷隆盛等によって断行され、「今般地租改正ニ付旧来田畑貢納ノ法ハ悉皆相廃シ更ニ地券調査相消次第土地ノ代価ニ随ヒ百分ノ三ヲ以テ地租ト可相定旨被……」（「地租改正に関する布告」太政官布告第272号、1873.7.⁽³⁾28）と、明治維新と「地租改正」のごとく、さらに第二次大戦後の戦後復興期に、戦前から進められていた自作農創設が、連合軍総司令部（GHQ）によって推進され、「1946年11月には内地の農地の約46％が小作地であったが、50年8月には11％弱に減少した⁽⁴⁾」ように徹底化が図られ、戦後の三大経済改革の一つでもあったこの「農地改革」のように、日本史上の歴史の画期点には、「土地改革」がある。

近世社会初頭においても、近世社会を生む「産婆役⁽⁵⁾」となった豊臣秀吉による「太閤検地」は、その土地改革とそれに伴う兵農分離の社会制度化によって、「中世社会」から「近世社会」移行の大きな画期となった。また「関ヶ原の戦い」後の徳川政権にあっても、「検地」は続けられて、「江戸幕府最後の総検地は、元和～元禄年間（1681～1703）に行なわれ⁽⁶⁾」、「軍役」の確定や貢租収入の確保など、その後の幕府直轄領石高四百数十万石の基盤となった。そして同様の検地は、幕府以外の諸藩の大名によっても江戸時代の元禄期までは実施、継続された。

太閤検地は、豊臣秀吉による1582（天正10）年の「山崎の戦い」の勝利の直

後の、「山城の寺社領から指出の徴収」⁽⁷⁾から始まり、「竿入れ」等の「太閤検地の原則は九十年頃⁽⁸⁾に確立⁽⁹⁾」した。検地は、検地が行なわれる時まず前もって検地条目が検地奉行に対して定められて検地の方法が決定され、村単位で実施された。検地の実施の段階では、村内の地字が決められ、耕地一筆ごとの田畑、屋敷地（家、庭を含めた屋敷地）が測量され、石盛（斗代）によって反当りの法定の見積生産高が確定した。1594（文禄3）年島津領に対する検地では1反当りの石盛によると、「嶋津殿分国御検地斗代之事」⁽¹⁰⁾によって、「上ノ村の上田1石6斗代・中田1石4斗代・下田1石2斗代、上畠1石2斗代・中畠1石代・下畠8斗代、また屋敷方は1石代」⁽¹¹⁾となっている。このように検地以降の村は、その全面積、村の石高（村高）や村の範囲と村境が確定することによって、近世社会の行政組織の末端に位置し、村内に「庄屋」や「本百姓」等のピラミッド型の階層を組織して、「自治的な機能を一貫して持ちつつ」、農村支配を受けながら、村請制に基づいて、検地帳に登録された耕地の名請人が年貢・小物成・課役の貢租を負担した。その農民の年貢負担率は、江戸時代を通じて平均5公5民といわれるが、幕領と私領の大名領を比較した場合、表1および表2のように総じて幕領の方が農民の年貢負担率が低く、「幕末期に近づくにつれて租率が低下する傾向は私領でもみられる」⁽¹²⁾ようになったとされる。

②「小農」の自立と商品流通

太閤検地以降兵農分離の進行によって、農家経営等の面からも農民側に大きな変化がみられるようになった。中世社会までの「家父長制的複合家族経営」⁽¹⁴⁾は解体し、「先進地帯では、十七世紀半ばには複合家族の形態⁽¹⁵⁾がほとんどなくなり、「小農」の自立のなかで、「農業の粗放性」から「農業の集約化」⁽¹⁶⁾が図られた。また表3、表4にみられるように「多労働の投下とほとんど役畜を使用しないという二点の特徴」⁽¹⁷⁾をもった、単婚小家族農民経営が展開していくようになる。この農民の農業生産の場である「村方」の村と家の状態をみると、1733（享保18）年の幕領のモデル村落の事例から、表5のようになり、また1804（文化元）年の幕領の全国平均1カ村当りでは、「村高が408石5斗7升、1カ村当りの人口が404.94人」⁽¹⁸⁾となっている。その村の大きさも、このモデル

のように村高が400石～500石程度の場合、「平野部⁽²⁰⁾に所在する村の広さは、東西、南北10数町前後」の範囲とみられている。

このような「小農」はその成立過程で、自らの生産力の低さを克服していくために「マキ」・「ユイ」と呼ばれる分業・協業関係を成立させ、村落共同体をつくった。特に当時の農業にとって不可欠な肥料施肥の刈敷のための「入会地」の協同利用や、田植等の協同作業、また水田稲作にとって絶対的条件である用水の公平配分や共同利用が行なわれ、「小農」の家族農業労働を中心としながら、村落共同体との生産関係のなかで、「小農」的農業経営が展開していくようになったのである。

またこのような「小農」生産の商品流通面をみると、その初期の状態では、非自給品である鉄製農具や塩また古着類は村外からの六斎市や行商人を通じて、自らの生産物と交換していた。しかし兵農分離による商業、手工業の都市集中政策により、また生産物地代である貢租の米納化や銭納化によって、新たに成立してきた「城下町の出店というべき新地方市場⁽²¹⁾」である「在町」に、農業生産物の一部分を販売して、鍬や鋤等の農具、塩、衣類等非自給品の購入や銭納のための貨幣を求め、さらに畑作地帯の農民にあっては米納のために「米」をこの市場で取得した。

このような小農生産の確立と「在町」を中心とする新地方中心の商品流通はやがて、次章でみる農業生産力の発展および広範な社会的分業の進展や農民の貢租負担率の低下などによって、寛文・延宝期に境に農民側に農民的剰余生産物が形成されるようになる。この剰余生産物をめぐって新興商人が台頭し、またまさに荻生徂徠が『政談』で述べたごとく「近年は、元禄のころから田舎にも銭が行き渡って、銭で物を買うようになった」ように、全国の商品流通が展開していくようになった。

③ 武士団の都市在住と消費集団の創出

太閤検地と兵農分離の過程は中世以来の武士社会にも大きな変化を与えた。1589(天正17)年の豊臣秀吉の「検地御掟」によると、「給人百姓にたのまれ、礼儀・礼物一切これを取るべからず、後日に至りても、聞こし召しつけられ次

第御成敗を加えられるべきこと」⁽²³⁾と家臣団にも検地が徹底化されるなかで断行された。中世の「郷侍」の農業経営が「一領具足と云侍一人分の領地」⁽²⁴⁾と言われ、またその耕地・居住も「後に山を負て、前に田をふまえ、左に流を用いて、右に畠を押へ、親譲の地方を屋敷廻りに多く控える」⁽²⁵⁾という形態であった。しかし検地によって武士が自作の農業生産に従事する「半農半武」⁽²⁶⁾の状態からもまた先祖代々からの在地性も断たれ、大名領主は家臣団（中間・小者を含む）と共に都市に集住させられるようになった。このことはいわゆる大名が「当座」の領主、「鉢植えの領主」⁽²⁷⁾となったことを意味し、それは伊勢国の津藩主藤堂氏の「我らは当分の国主、田畑においては公儀の物に候」、また岡山藩主池田氏の「国をわが物と御思ひ候はば御ちがいに候、上様（将軍）より御あづかり成られ候とおぼしめし」⁽²⁸⁾と藩主の所領に対する姿勢によく現れている。

さらに1588（天正16）年の「刀狩令」と1591（天正19）年の身分統制令の「掟」によって、「農民身分」「侍身分」がより明確に確定化されるなかで、兵農分離の体制は、「領主化しつつあるいわゆる『中世』⁽²⁹⁾の名主層を農民身分に定着させる側面」⁽³⁰⁾と前述の武士団の「本領地の自然消滅」⁽³¹⁾による都市居住によって、武士・農民間の「支配＝従属の関係を、個別的なものから、組織的・間接的なものへと変化」⁽³²⁾させ、また武士と農民が地理的・空間的に分離することによって、武士が「農民の行なう直接の労働過程に参与」⁽³³⁾しないという、中世社会とは全くことなった、またヨーロッパにもなかった近世的領主制社会を完成させた。

一方この兵農分離の過程で、商人、職人は「町人」として、武士と共に都市である城下町の「町方」に在住し、流通と工業生産を担うようになる。その意味で、近世以降江戸時代の「都市」は、武士と町人による人口集中と土木建設によって「造られた町」として機能していくようになる。

農民側は、農村である「村方・地方」に在住し、「一所懸命」＝「小規模労働集約化」⁽³⁴⁾のなかで、農業生産と農産物加工に従事した。武士はやがて「単なる戦士や領主の概念に解消することのできない独自の性格を具え」⁽³⁵⁾た「役人」⁽³⁶⁾として、直接生産過程から分離した都市在住の「消費階級」⁽³⁷⁾となった。このように武士・農民・町人の関係は、近世的身分制⁽³⁸⁾のなかに社会的分業関係を現している。そしてその関係がまた地理的・空間的にも分離しているがゆえに、江戸

時代は、交通関係（海上・陸上・河川・湖沼交通や交通政策等）の整備のなかで、地方と都市（特に三都）を結びまた地方市場と全国市場を結んで展開する「商品流通」を前提とする社会でもあった。

(2) 近世前期の開発と商品流通の展開

①近世前期の開発の概要

中世末下剋上の時代をリードした有力戦国大名の経済的背景には、織田氏・武田氏・今川氏・上杉氏のように中部山岳地帯の自然地形にめぐまれたところに位置し扇状地など豊かな農業基盤となるものが背景にあった。また伊達氏の陸奥半田金銀山、後北条氏の伊豆土肥金銀山、島津氏の水野山ヶ野金山、毛利氏の石見銀山、「天正越座金」を鑄造したとされる上杉謙信は佐渡金銀山をかかえ、「甲州金」を鑄造した武田氏は黒川金山を持ち、このように有力戦国大名は、「金銀は軍資金や恩賞用に重要」視した経済的基盤としての、金銀銅鉱山を領有していたのである。

織田氏や武田氏の出自した中部山岳地帯は、表6のごとく、日本で最も多い扇状地がある。この地帯は、日本有数の急流大河川地帯で太平洋側に流出する木曾三川や大井川・富士川や天龍川など、また日本海側に流れる九頭竜川・黒部川や信濃川などがある。またこの山岳地帯には、甲府・諏訪・長野・松本盆地等の多くの盆地があり、この大河川上流部の中小支流が沖積平野やデルタを形成した。この地帯に、武田氏の釜無川にみられたように甲州流・信玄流といわれる低水工事の柔構造による治水や用水、また新田開発が行なわれ豊かな農業生産を確保していくようになった。

このように中世末から近世前期にかけては、その前の時代に類例がないほどの土木技術が発達し、大土木工事が行なわれた時代でもある。鉱山特に非鉄鉱山の開発が行なわれ、城建築は山城から平城と代わり「土木から建築へといった造形技法の比重の変化」による近世城郭が築城されるようになった。さらに用水・新田開発・治水・舟運のための河川開発等により、日本（北海道と沖縄を除く。当時の北海道と琉球王国であった沖縄はいうまでもなく外国であった）の「列島改造」がなされた開発の時代でもあったのである。

② 鉱山開発と貨幣の鑄造

近世前期の金銀鉱山の開発をみると、採鉱のための坑道掘の普請（土木工事）では、近世初頭頃よりそれまでの「溝掘（露頭から溝を掘って鉱脈に沿って採鉱する）。つるし掘（堅穴による採鉱）。犬下り掘（鉱脈にそって坑口から地中に掘り入ってゆく採鉱）」の3種類の露頭採鉱法から、「鉱脈に直角に切りあてて横相、さらに鉱延べ・横相の方位をたてて外部から掘り進む寸甫（寸法）切」などの間歩（坑道）掘りの坑道採鉱法が採用されるようになった。また採鉱での最大の障害とされた湧水の排水に対して、古くからあった桶や釣瓶のほか、鉱山排水の先駆的技術となる木製・竹製の樋による樋引きで「数十丁をリレー式に上下にならべて相当の高低差を揚水」した。さらに揚水機として「18世紀後半にオランダのフランカスホイットという揚水機を佐渡へもってきて試用」したこともあったようであるが、実際は坑道の広さなどの関係から井車や釣瓶が使用されたようである。また疎水坑（水貫）も大規模のものが掘られるようになり、佐渡では1626（寛永3）年から13年かかって「約873メートル」もの疎水坑が掘られた。

次に金銀銅の選鉱・製錬の冶金技術をみると、「酸化製錬法（含銀鉛鉱処理）……南蛮絞り（含銀粗銅処理）、破裂分離法（金鉱処理）、塩焼法（金銀分離）、山下吹（銅鉱還元製錬）、アマルガム法」などの冶金法があり、アマルガム法は、慶長年間にスペイン人によってもたらされた銀製錬法であったが、材料となる水銀の供給が充分でなかったため短期間の内途絶えた。製錬技術のなかでも16世紀に定着した灰吹法、南蛮絞りは銀の生産高を飛躍的に増大させた。

灰吹法は、1533（天文2）年石見銀山で銀製錬に成功したもので、銀鉱に鉛を加えて溶解しこれを灰吹法により鉛を酸化して銀を収取する方法で、『鼓銅圖録』では「出鉛を以て灰爐の中に入れ、炭火にて徐かに鎔かし吹けば、鉛は灰の中へ沈み、銀ばかり中央にあらわれ出づ。これを灰吹銀といふ」と説明している。この灰吹法の成功は、「近世鉱業史上画期的な意義」を持つとされる。この技術は、15世紀に中国明で確立しており、日本には「おそらく朝鮮を通じて伝習された」ものとされる。また南蛮絞りは、「わが国の南蛮絞りは住友家の所伝では、祖泉屋理兵衛の実父蘇我理右衛門が天正十九年（1591）頃南蛮人から

伝授されたという」⁽⁵⁰⁾が、その事実関係や年代は定かでなく、おそらく16～17世紀頃ポルトガル人かスペイン人によってもたらされたようである。その製錬法は、「含銅を爐の中に入れ吹鎔し、汁にならざる程にし、鉄の道具を用ひ操れば、銅は上の方にとゞまり、鉛は汁となりてながれ出づ。此の銅をしぼり銅といふ。鉛を出鉛といふ。かくすれば、銅に含める銀を鉛へ勾引出づ。これをしぼり吹きといふ。異国より傳へたる吹きかたなれば、南蛮紋りともいふ」と『鼓銅圖録』では説明し、「銅と鉛の溶解度と比重の差、銀と鉛の合融し易い性質を利用して含銀鉛を分離……し、これを灰吹して銀をとった」⁽⁵¹⁾製錬法であった。

この南蛮紋り等にみられるような技術伝播の背景には次のような国際的關係がある。当時ヨーロッパの特にポルトガル・スペインによる「レコンキスタ」運動や宗教改革により新教となったプロテスタントの台頭により、カトリック（日本ではキリシタン）が東方への伝導活動を求めアジア（これらの運動の初期において当時のヨーロッパ人には、アメリカという地理的意識はなかった、つまり存在そのものを知らなかった）へ進出して来ていた時期にあたる。日本の中世末から近世初頭は、このような背景のなかで我が国がヨーロッパ文明と初めて接触する時期でもあり、大きな国際的契機の中で日本の文化的対応のなかから受け入れられた新技術でもあったのである。それはまさにフランソワ・コワネが「日本鉱物資源に関する覚書」で指摘したとおり、「……鉱山稼行の技術は、日支両国の交渉が繁雑となった時代に、支那から輸入せられたものと考えられる。……西紀1572年から1585年の間の太閤様の時代に、鉱山開発が最も進展してきたのであるが、それが恰も宣教師の勢力の最大となった時代の前後数年と符号する事と、新しい採鉱冶金技術が国内に拡がり、所業の急速な発展の原因」⁽⁵²⁾……」となったのである。

このような坑道採鉱法と冶金技術の進展は、当時、日本を世界でも有数の金銀産出国とした。表7は、16～17世紀の世界銀・金平均1カ年産出高であるが、小葉田淳氏の研究によると、日本における16世紀末期の生野銀山の運上銀が1カ年20,000 kg、17世紀初期の石見銀山の運上銀12,000 kgで、ほぼ同時代の佐渡相川鉱山の産銀額は1カ年60,000～90,000 kgで、また日本の17世紀初期の銀の輸出は1カ年200,000 kgに達したとしている。このように当時の日本は、

世界でも名だたる金銀産出国で、それはまさに「マルコ・ポーロ」のいった“湧きでる黄金の国”といってもよいほどであった。

このような近世前期の国内諸産業の発展と国際経済的な時代を背景に、豊臣氏や徳川氏は他の戦国大名とは「比較にならぬほどの金銀を蓄積」⁽⁵⁶⁾して、やがて天正大判を鑄造した。これは流通貨幣というよりは主に戦争の武勲などの恩賞にあてられたようであるが、徳川政権以降江戸時代⁽⁵⁷⁾の金貨の原型となる貨幣にもなった。

「関ヶ原の戦い」後、天下統一の実権を掌握して徳川政権の時代になると、徳川家康は、1601（慶長6）年、慶長大判・小判・一分判、慶長丁銀・豆板銀を鑄造した。慶長小判は規定の品位が84.29%と非常に純度が高く、一分判と合わせて「14,727,055両」⁽⁵⁸⁾、また慶長丁銀・豆板銀の品位は80.00%で両者合わせて「1,200,000貫」⁽⁵⁹⁾が鑄造された。また渡来銭に代わって寛永通宝などの銭貨も公鑄され、ここに金・銀・銭の三貨が本位貨幣、補助貨幣の区別なく、貫・匁・分・厘などの重量単位をもって、全国的に流通して行くようになる。1609（慶長14）年には、金・銀・銭の公定の三貨交換割合が確定し、金1両＝銀50匁＝銭4貫文と定められ、あたかも今日の為替相場のように変動した。そして元禄時代には、大坂の金高、江戸の銀安となり、公定相場が金＝1両＝銀60匁（銭は4貫文）と改定された。

中世の1323（元亨3）年朝鮮半島の海中に沈没した「新安沖沈船」を引き上げたところ、船底から「約二十八トン」⁽⁶⁰⁾、「約八〇〇万枚」⁽⁶¹⁾という中国銭が出土し、当時いかに大量の中国の宋銭や明銭がいわゆる渡来銭として輸入されていたかが知られる。江戸時代の貨幣鑄造の動向は、こうした自国内の貨幣流通を外国銭で賄う段階から、自前の貨幣の素材を使って三貨を公鑄し、中央統一貨幣として全国的に流通させるようになったのである。

江戸時代は一般に江戸の「金遣い」、大坂の「銀遣い」と、東西に差があったが、1615（慶長20）年頃には、江戸・大坂で両替商も創業し、貨幣流通の円滑化が図られた。また江戸幕府の貨幣流通政策によって「わが国最初の本格的通貨切り替えが迅速に達成」⁽⁶²⁾され、渡来銭に代わって新鑄された三貨が流通し、ここに商品流通を全国的に発展させるべく、貨幣経済が急速に浸透していった。

表 1 幕領10力年の平均租率

| 期 間 | 平均租率<％> |
|-----------------------|---------|
| 享保 1<1716>～享保10<1725> | 33.87 |
| 元文 1<1736>～延享 2<1745> | 34.38 |
| 宝暦 6<1756>～明和 2<1765> | 37.21 |
| 安永 5<1776>～天明 5<1785> | 33.56 |
| 寛政 8<1796>～文化 2<1805> | 34.47 |
| 文化13<1816>～文政 8<1825> | 33.80 |
| 天保 7<1836>～天保11<1840> | 31.11 |

表 2 岸和田藩の租率

| 年 代 | 取米高<石> | 平均租率<％> |
|------------|-----------|---------|
| 享保 1<1716> | 42,581.47 | 77.42 |
| 寛保 1<1741> | 43,803.25 | 79.64 |
| 天保 2<1831> | 40,848.94 | 74.27 |
| 嘉永 5<1852> | 39,706.22 | 72.19 |
| 元治 1<1864> | 30,962.38 | 58.42 |
| 慶応 1<1865> | 31,853.17 | 60.10 |
| 慶応 3<1867> | 31,740.09 | 58.81 |

(注) 表 1・表 2とも井上光貞編『日本歴史体系 3 近世』p.435の表より作成し、岸和田藩の取米高の小数点3ケタは四捨五入してある。

表 3 1657<明暦 3>年加賀国
能美郡草高百石開作入用

| 項目 | 内 訳 | 費用<石> | 比率<％> |
|-----|----------|-------|-------|
| 種代 | 種籾他 | 2.00 | 3.6 |
| 尿代 | | 9.20 | 16.4 |
| 農具代 | 鋤鋤摺臼代他 | 2.30 | 4.1 |
| 馬飼料 | 3疋分 | 4.00 | 7.1 |
| 給米 | 男6人,女3人分 | 8.60 | 15.4 |
| 飯米 | 男女9人分 | 16.74 | 29.9 |
| 他Ⅰ | 塩味噌他 | 4.00 | 7.1 |
| 他Ⅱ | 着類代他 | 9.20 | 16.4 |
| 計 | | 56.04 | 100 |

(注) 表 3・表 4とも佐々木潤之介「近世農村の成立」p.173より作成。

表 4 1676 年<延宝 4>年加賀国
能美郡草高百石開作入用人馬

| | 堅 田 | 沼 田 | 平 均 |
|---|-----|-----|-------|
| 男 | 8 人 | 7 人 | 7.2 人 |
| 女 | 7 人 | 4 人 | 4.5 人 |
| 馬 | 3 疋 | 2 疋 | 2.2 疋 |

(備考) 100 石は 58.8 反<1 反=300 歩>

表 5 1733<享保 18>年幕領の村落の事例

| 村 高 | その反別 | 家 数 | 人 口 | 馬 |
|------------|-------------------|------|-----------------|-----|
| 200 石 7 斗余 | 22 町 5 反 8 畝 25 歩 | 24 軒 | 120 人 <男女同数> | 6 匹 |

(注) 井上光貞編『日本史入門』有斐閣, p.143 より作成。

表 6 日本の扇状地分布

| 地 域 | 扇状地数 | <%> |
|-------|------|------|
| 北 海 道 | 70 | 17.1 |
| 東 北 | 77 | 18.8 |
| 関 東 | 45 | 11.0 |
| 中 部 | 113 | 27.6 |
| 近 畿 | 58 | 14.2 |
| 中国・四国 | 24 | 5.9 |
| 九 州 | 22 | 5.4 |
| 計 | 409 | 100 |

(注) この表は、玉城哲・旗手瑛『風
土一大地と人間の歴史』平凡社、
p.193 の表 4 より作成した。

表 7 16～17 世紀の世界銀・金
平均 1 カ年産出高

| 年 次 | 銀の産出量<kg> | 金の産出量<kg> |
|-----------|-----------|-----------|
| 1561～1580 | 299,500 | 6,840 |
| 1581～1600 | 418,900 | 7,380 |
| 1601～1620 | 422,900 | 8,520 |
| 1621～1640 | 393,600 | 8,300 |

(注) この表は、小葉田淳『日本鉱山史の研究』p.6 の表 1.1
より作成した。

〔注〕

- (1)(2) 井上光貞他編『日本歴史体系 1 原始古代』山川出版社, p.401.
 (3) 安藤良雄編『近代日本経済史要覧』東京大学出版会, p.50.
 (4) 中村隆英「概説 1937—54 年」(「計画法」と「民主化」, 『日本経済史』7, 所収) 岩

波書店, p.40.

- (5) 脇田修『秀吉の経済感覚—経済を武器とした天下人』中公新書, p. 1.
- (6) 神崎彰利『検地—縄と竿の支配』教育社, p.163.
- (7) 三鬼清一郎「太閤検地と朝鮮出兵」(『<新> 岩波講座日本歴史 9 近世1』所収) 岩波書店, p.91.
- (8) 文中の「九十年頃」は, 1590 年頃である.
- (9) 脇田修『織豊政権論』(『講座日本史 4 幕藩制社会』所収) 東京大学出版会, p.34.
- (10)(11) 安良城盛昭『太閤検地と石高制』日本放送協会, p.132.
- (12) 網野善彦『日本の歴史をよみなおす』筑摩書房, p.12.
- (13) 井上光貞編『日本歴史体系 3 近世』山川出版社, p.436.
- (14) 佐々木潤之介「近世農村の成立」(『<旧> 岩波講座日本歴史 10 近世2』所収) 岩波書店, p.174.
- (15) 児玉幸多「身分と家族」(『<旧> 岩波講座日本歴史 10 近世2』所収) 岩波書店, p. 258.
- (16)(17) 佐々木潤之介「大名と百姓」(『日本の歴史 15』所収) 中央公論社, p.25.
- (18) 佐々木潤之介「近世農村の成立」(『前掲書』所収) p.173.
- (19) 井上光貞編『日本史入門』有斐閣, p.143.
- (20) 木村礎『近世の村』教育社, p.30.
- (21) 佐々木潤之介「近世農村の成立」(『前掲書』所収) p.204.
- (22) 武部善人「荻生徂徠『成談』中の経済関係部分の現代文要約」『太宰春台転換期の経済思想』お茶の水書房, p.114.
- (23) 神崎彰利『前掲書』p.56.
- (24)(25) 古島敏雄「近世経済史総論」(『日本経済史体系 3 近世<上>』所収) 東京大学出版会, p. 4.
- (26) 樋口清之『「温故知新」と「一所懸命」』NTT出版, p.51.
- (27) 朝尾直弘「太閤検地と幕藩体制」(『日本経済史を学ぶ<下> 近世』所収) 有斐閣, p. 9.
- (28)(29) 神崎彰利『前掲書』p.51, p.52.
- (30) 小野正雄「近世の政治と経済」(井上光貞他編『日本史研究入門Ⅳ』所収) 東京大学出版会, p.184.
- (31) 脇田修「職豊政権論」(『前掲書』所収) p.33.
- (32) 尾藤正英「徳川時代の社会と政治思想の特質」(『思想』No.685, 1981. 7 所収) p. 3.
- (33) 永原慶二編『日本経済史』有斐閣, p.103.

- (34) 樋口清之『前掲書』p.52.
- (35) 尾藤正英「明治維新と武士—『公論』の理念による維新像再構成の試み—」(『思想』No.735, 1985.9 所収) p.1.
- (36) 尾藤正英「徳川社会の政治思想の特質」(『前掲書』所収)を参照のこと。
- (37) 近世の身分としては「公家・神職・僧尼・百姓・町人および賤民」(児玉幸多「身分と家族」『<新> 岩波講座日本歴史 10 近世 2』所収, p.226)をあげることができるが、ここでは生産・流通過程の中心的担い手としての士・農・工・商を意味している。
- (38) 山口和男『貨幣の語る日本の歴史』そして、p.46.
- (39) 小葉田淳『日本鋳山史の研究』岩波書店, p.3.
- (40) 上山春平『城と国家』小学館, p.18.
- (41) 佐々木潤之介「鋳業における技術の発展」『技術の社会史 2—在来技術の発展と近世社会』所収, 有斐閣, p.190.
- (42) 小葉田淳「近世の鋳山技術の変遷について」『日本経済史の研究』所収, 思文閣出版, p.24.
- (43/44/45) 小葉田淳「近世の鋳山技術の変遷について」『前掲書』p.26, およびp.27.
- (46) 佐々木潤之介「鋳業における技術の発展」『前掲書』p.193.
- (47) 「鼓銅圖録」三枝博音編『復刻日本科学古典全書 第9巻 産業技術編 採鋳冶金』所収, 朝日新聞社, p.269.
- (48) 小葉田淳『日本鋳山史の研究』(前掲) p.26.
- (49) 小葉田淳「近世の鋳山技術の変遷について」『前掲書』p.28.
- (50) 小葉田淳「近世の鋳山技術の変遷について」『前掲書』p.29.
- (51) 「鼓銅圖録」『前掲書』p.268.
- (52) 小葉田淳「近世の鋳山技術の変遷について」『前掲書』p.29.
- (53) 佐々木潤之介「鋳業における技術の発展」『前掲書』p.186.
- (54) 小葉田淳『日本鋳山史の研究』(前掲) p.6.
- (55) 小葉田淳『日本鋳山史の研究』(前掲) p.3.
- (56/57) 安藤良雄編『前掲書』p.31.
- (58) 網野善彦『前掲書』p.47.
- (59) 鈴木公雄「地中から掘りだされた近世像—六道銭の考古学」(『争点日本の歴史 5 近世編』所収) 新人物往来社, p.375.
- (60) 鈴木公雄『前掲書』p.381. なお鈴木氏はこの書のほかに「出土六道銭の組合せからみた江戸時代前期の銅銭流通」(『社会経済史学』第53巻第6号, 1988.2)の論文で、江戸時代の死者といっしょに埋葬された俗に「三途の川の渡し賃」といわ

れる「六道銭」の考古学史料と東海道・中山道の宿場文書を使って、江戸前期の貨幣流通と幕府の貨幣流通政策を詳細に分析し前記の結論に達している。

(1991. 6. 20 1章担当, 古谷正勝)

2 江戸時代における商人の合理的精神(その1)

(1) 近代国家日本を支えた江戸時代

明治維新後、近代国家を歩んだといわれる我が国では、西洋の歴史とそれを支える歴史観を教育に導入し、日本人に対し西洋の異文化の優位性を伝え、異なる合理的な精神構造の認識を知覚させるに到った。このような認識は、反面日本の歴史や歴史観を西洋的な視点から観るため、その認識を一部歪めることにもなった。その代表的な事例が「江戸時代」をめぐる評価である。戦前、戦後の教育の中で江戸時代は正に暗黒の時代としてとらえられ、封建体制や専制政治、鎖国による著しい前近代制の停滞等、数えきれないほどの憎悪にも似た評価を長い間に下していた。

しかし、近年における日本の経済力の発展は、単に西洋史の価値観のみが優れているのではないことを日本人に自覚させるに到った。経済大国日本が日本文化や伝統、歴史を冷静に評価をしたり、再考をする機会をもたらししたのである。その代表的なものの1つが江戸時代の評価である。つまり、江戸時代は日本の近代化に何かのかたちで受け入れの準備をし、近代に受け継がれている部分があるという認識である。

近江商人の一連の研究で知られる小倉榮一郎博士は、その著書の中で「近代化」に対する日本人の有する常識を次のように批判している⁽¹⁾。

「日本の近代化が明治維新から始まったというのは西洋かぶれした日本人の見解であって、これが生活の中にまで浸込んで自ら卑下する心情となり、国際的な舞台でずい分不利な結果になっている。日本の近代化は多くの点で元禄頃に

始まり、独特の経過を辿って確立してきたものが、明治維新で流入した西洋からの影響を割合に素直に同化させることができて、目に見えて促進されたのである。」

もちろん、上記のような江戸時代をめぐる評価は、今に始まったものではなく、一部の論者によって強く主張されていたことは周知の通りである。⁽²⁾ この中には、明治維新後に来日した西洋人も含まれている。小島慶三教授は、明治維新後、日本に来日しユニークな視点を有する人物としてメチニコフの『明治維新論』を高く評価し、次のように紹介している。⁽³⁾

「メチニコフによれば、維新は西洋の力(ショック)で行なわれたわけではなく、日本の内発的な力でそれは実現したのだという。維新をもたらしたのは、日本人の民族的な力、身分的な平等観、進取の気性、それに無神論的性格——これらによって、日本人は自分の力で殻を割ったのだというのが彼の見方であった。西洋の力によって日本の維新がなされたというのは、あくまでも西洋人の自己中心的な歴史認識であって間違いである。西洋には西洋の、日本には日本の要因があるといつてのけたのである。」

このような独自の文化を形成した江戸時代を知ることが、日本の近代化を知る手掛りになるという視点は、次の山本七平氏の主張に要約されていると思われる。⁽⁴⁾

「江戸時代は、日本の歴史の中で、最も興味深い時代である。というのは、一言でいえば、これは『日本人の自前の秩序』を確立した時代であり、それが三百年近く継続した時代であるからである。

いわば、明治のように西欧を模倣し、戦後のようにアメリカを模倣した『マネ時代』でもなければ、古代の日本のように、中国のみが典拠であった時代でもなかった。『マネ時代ではない』という意味では、最も独創的な時代であった。当時の思想家は、本当に考えねばならなかった。また政治家は、模索をしつつ新しい秩序を確立しなければならなかった。

そして、その際に準拠しなければならぬものがあるとすれば、それは、自己の精神構造とそれに対応した社会構造である。秩序はこの上に建てねばならず、それ以外に基盤はない。これは『あたりまえ』のことであり、この『あた

りまえ』をあたりまえとして実行していったのが、この時代であったのだ。」

ここで問題となるのが、この独創的な精神構造はどのように醸成されたかという点である。特に近代日本の経済発展の土台を形成した商人の精神構造——商人道とも呼べる経営観——にふれ、その合理的精神構造とそれを裏づける計数管理について考察する点にある。

(2) 商人の合理的精神へのアプローチ

江戸時代の商人の特性を研究する方法にはいくつかのアプローチがあると思われる。封建体制下の制度的特質の中で商人を研究する「制度論的アプローチ」、武士や農工との組織体との関係で商人組織の特性を考察する「行動論的アプローチ」、商人独自の心理的・宗教的特性を研究する「文化的・宗教倫理的アプローチ」、江戸時代がおかれていた経済状況や国際経済⁽⁵⁾の視点から商人の経済行為を研究する「経済論的アプローチ」等があげられる。

このアプローチで特に注目したいのは、「文化的・宗教倫理的アプローチ」である。つまり、1つの経済現象やそれを取りまく理念を考察する場合でも、単に外的—経済的な利害関係のみでなく、内的—人間的な利害関係の文化的諸領域にも考察を加え、これを目的—手段という目的論的関連に組みかえを行うことにより、社会を生成・形成・発展させる動機の意味理解を試みようとする必要があるからである。⁽⁶⁾

このような視点の代表的な見解がマックス・ウェーバーである。ウェーバーによれば、近代西欧資本主義経済の営利行為は、貨幣による資本計算に立脚して行われるため、自由な労働の合理的資本主義経営組織や家計と経営の分離と、ロビンソン・クルーソーが島で行った合理的精神による簿記法の認識⁽⁷⁾がなければ資本主義経営の近代化や合理的経営組織の発展はなかった、と主張する。このウェーバーの視点に立脚し、青山秀夫博士は、ロビンソン・クルーソーの行動様式の1つである「信仰の記帳」と呼ばれる計数化された合理的・経営性⁽⁸⁾格に関連し、「算術」にあたる簿記の特徴を次の3点にまとめている。第1は、計算の網羅性ないしは包括性、第2は、記帳が勘定系統によって組織的に行われること、第3は、一切の経済事象の文書化・数量化による正確性、である。

このような営利動機に基づく利益追求の人間の精神的な活動である近代資本主義の精神(エートス)は、資本計算を中軸にした会計において高度に形式化され、計算化されるのである。

近代西欧資本主義経済では、貨幣で評価された営利資本とその結果の損益を評価し、資本の増殖計算が行われる。この経済活動を貨幣によって統一的に評価し、その資本循環を組織的・秩序的に検証可能な統括的方法で把握するのが簿記に他ならない。近代西欧資本主義経済は、人間を資本という営利動機にかりたて、それを満たす貨幣の調達があり、その活動の結果として利益という資本価値変動が認識されることになる。営利動機を有した主観的人間行為が、非人間的で即物的な計数管理である簿記を中軸にした計算機構に組みこまれていく過程は、本章の目的と別の意味で注目されなければならない。

それでは日本ではどうなのであろうか。近代の資本主義を支えた日本企業の商人道の原型を形成したといわれる江戸時代の商人の文化的・宗教倫理の特性を研究することは、日本の近代化を知る上で重要な要素となる。

(3) 江戸時代の商人像

①商人像の時代区分

江戸時代の町人の基本的な性格は幕府や藩体制に何らかのかたちで関与し、時には寄生することによって富の蓄積を計るケースが多かったが、必ずしも「政商」といわれるものでもなく、幕藩体制下の中でその体制を利用して力強く生きたという評価が一般的である。源了園教授は、江戸時代の町人の基本的性格が幕藩体制への寄生で終始一貫しているとの前提で町人の時代的特徴を次の4段階⁽⁹⁾で示している。

①御用商人的出入商人的性格が最もよくでた三代、四代、五代将軍の頃の放胆な投機家としての商人が活躍した時代。

②元禄期あたりから、幕府と特定の関係を有さず、自分の「智恵才覚」によって町人としての可能性をきり開いた商人が活躍した時代。

③②の商業資本が発展した結果、商業組織もしだいに整備され、智恵才覚だけではやっていけない中で、商人社会の信用組織の確立した時代。

④田沼時代に江戸商人によって形成された元禄復興気質での「蔵前風」商人で、倹約を大切にする大坂商人と対象をなす札差を中心とした商人の時代。

この区分の中で、特に我々が注目するのは②の時代である。西鶴の文学に表われた町人の姿は生き生きしており、しかもそこに思想が感じられる。儒学を学び、神仏を尊び、堅実な性格がよく現われているといえる。本章で主に論述される商人像の多くはこの時代を前提にしているといつてよい。

②合理的経済認識の形成

小倉榮一郎博士は日本の近代化における商人の企業経営観⁽¹⁰⁾にふれ、元禄期等の商人の資本計算的成果計算を次のように強調している。

「企業経営に関してもこれは明白である。その諸点のうち、日本の商人が資本意識を確立していたということを強調したい。

企業と家計を分離するといわれるが、そのような程度ではないのである。近江商人が店というものを主人の個人の所有と考えないで、家財とは別の独立した財団であり、祖先が積み上げて、子々孫々に伝え、後継者はそれを維持発展させるという考え方、主人は先祖に対する奉公人と意識せよという経営理念を持っていた。」

周知のように、元禄期や化政期には農業生産の向上にともなう経済的な繁栄があり、衣・食・住（生活用品）を中心に都市を中心にした産業経済圏が発達した。⁽¹¹⁾この産業経済の発展は、商品の大量生産化を生み、初期の工業化にともなう資本蓄積とこれに対応する貨幣経済を日本に浸透させることになった。⁽¹²⁾京都・大坂を中心とした生産活動と当時世界最大の都市であった消費地江戸（東京）との商品流通システムも確立した。このため、この産業経済を支える商人は、どちらかという従来⁽¹³⁾の冒険商人から、「才覚」と「算用」を重ねる安定型定住商人へ変貌した。「才覚」とは現代でいうマネジメントであり、「算用」とはアカウンティングに他ならない。合理的精神＝近代西洋思想の伝統的歴史観の枠組みの中で、この「才覚」と「算用」こそ日本の合理的精神に他ならない。もちろん、この時代にあっても商売の世界は厳しいものがあつた。商家の浮き沈みは世の常とも思われ、「売家と唐様でかく三代目」といわれるほど事業の継

続は困難を極めた。⁽¹³⁾ この「のれん（暖簾）」を守る「才覚」とその才覚を計数的に把握して経営にあたる「算用」の精神は、むしろこのような商売の厳しい世界の中で生まれたものに他ならない。そのため律気に誠実さをもって地道な取引をし、信用や世間との義理を重んじる「商人道」とでも呼べる独自のビジネスの倫理が形成されていった。そして、このような商人道ともいえる江戸時代の商人の進取の気性、誠実さ、公共心、計算管理が明治以後における大阪の企業や産業の発展の下地となり、日本の発展の土台ともなった、ということは多くの論者が指摘することである。

③封建体制下での特殊な商人階層と儒教

「士・農・工・商」の封建体制の基本は、武家中心の国家形成にある。そして、それを維持するための道徳思想も強化された。その最下位にある商人の地位は特殊なものであった。つまり、命をかけて国を守る武士でもなく、朝から夜遅くまで汗を流して農産物や生活必需工業品を創り上げる農民や工人とも異なるものである。つまり、一面では、店にいて汗も流さず他人が創り上げた商品を右から左に移して生計をたてる“けしからん”階層として、今一方では、巨大な資金と情報量を有して封建体制を陰で支えた“頼りになる”階層として正に特殊なものであった。この特殊性は、商人自身の中にも卑屈感を生んだ。つまり、武士に対する身分的支配下の中で、商人の中に報恩・冥加・冥利の観念が生じ、武士権力に対する「御無理御尤」の観念を生み、自己を卑屈にさせる根性を自ら生むことになった。⁽¹⁴⁾

それでは、武家中心の国家形成のもとでは、営利を追求する商人の行為は、道徳的になぜ「悪」であったのであろうか。汗もかかず、骨もおらず利益を得るという商人蔑視思想は、封建体制が領土(土地)を前提にした土地経済にあり、これを支える思想が農を本業とし商を末業とした儒教にあった。中国農業社会で生成した儒教のもとでは、その根本経済観が農本主義であったのは当然である。農業と商業の収入の機会と方法について表8で比較してみると、その両者の特徴がわかる。⁽¹⁵⁾

表 8 農業と商業の収入機会と方法

| | 農 業 | 商 業 |
|-------|------------------|-------------------------|
| 収入の機会 | 収穫は年1回 (節約第一) | 売買成立のつど発生 (節約第一ではない) |
| 収入の方法 | 穀物という現物 | 通 貨 |

為政者は、農業を重視しながら、その税徴収の面では穀物保存技術が必要となるため農業穀物を貨幣に代え、さらに社会資本に投下する。従って、農本主義といっても、実質的には貨幣経済であり、農業は觀念上、基本収入源泉として重視されていたにすぎない。これに対し、貨幣経済の担い手である商人はその社会における貨幣運用の実力を有するに到る。「節約」という儒教道德の徹底は、この年1回の収穫の希少性とその保存の困難性から来ているといえる。そして、節約ができる人物＝高度な人格者、という道德觀の形成は、単に武士や農工階層ばかりでなく、商人の「才覚」と「算用」（これに「始末」を加えて、3つの商人意識とする場合もある）の精神の中にも現われてくるのである。

このように江戸時代の土地本位制の農本主義の下では、商人の活動は建前上、蔑視されていたが、しかしその体制は実質は貨幣経済であり、商人の存在は無視できないどころか体制に多大の影響を及ぼしていた。ここに、まず体制下における商人階層の特殊性を指摘することができる。さらに、商人自身の中にも、自己の経済活動に対する思想上、道德上の負い目の認識が一方にあると同時に、巨額な資金を運用し経済を実質的に動かしているという自負心があり、屈折した商人の意識も浮かび上がってくる。この商人の心の中に内在する意識は商人の行動を考察する上での1つの糸口となる。

それでは儒教道德のもとで体制上軽視された商人の営利活動は、どのようにして思想的な支持をとりつけていたのであろうか。江戸時代の封建体制は、武士社会であり、武士が営利を追求する経済行為は禁止されていた。禁止というよりそのような行為は“恥”とされていたといった方が適切である。しかし、商人にとりこの営利を追求する経済行為こそ本業であつたし、商人の貨幣経済の行為を抜きに社会秩序を維持することも不可能であつた。この相矛盾するも

のを補い、連結させるものが、商人道とも呼ぶべき、「才覚」と「算用」であった。「才覚」と「算用」が商人の日常の営利思想を具現化させる機能的合理的精神であるなら、これらの根底にあり営利思想を支えた構造的合理的精神が「勤勉・儉約・誠実」であった。商人は、この商人道の確立を通し、単に利益のみを追求する階層ではなく、一定の倫理を有した思想的制限を免罪符として社会において容認されていた。商人道はこの意味で武士道を意識し、反映して生成されたものであった。

小島慶三教授は、士農工商の最下位におかれた商人階層の思想を支えた開祖といわれる石田梅岩の哲学を次のようにまとめている。「福を得て万民の心を安んずるのが、商人の心得でなくてはならない。これにより天地宇宙の正常な運行と同じ理想的経済社会がつくられる。販売拡張は天命にまかせ、同業共存で顧客の自由を保証し、公正な等価交換⁽¹⁾で商いを楽しむ」。これこそ商人道の本体であると梅岩は説くのである。

このような思想については、次号で考察をする予定であるが、我々が注目するのは、このような商人の合理的精神が現在でも受け継がれているという点である。平成3年6月11日付の日本経済新聞の朝刊に「片時も忘れるな」という小さな見出しで次のような記事が掲載されていた。

「『経済界自体の倫理と節度の問題で、今に限ったわけではない。企業経営をする場合、片時も忘れてはいけない基本の一つだと思う』（平岩経団連会長がバブル経済のツケともいえる事件が相次いでいることについて）」

江戸時代の商人の倫理観は現代ビジネスの世界にも生きているのである。

〔注〕

- (1) 小倉榮一郎『近江商人の経営管理』中央経済社、平成3年、p.127.
- (2) 日本の近代化がそのまま西欧化ではなく、発展段階は多様で西欧をモデルとした歴史観に方法論的に批判を加えたものとして、梅棹忠夫著『文明の生態史観』が参考になる。なお、江戸時代の近代化については、大石慎三郎・中根千枝著者代表『江戸時代と近代化』筑摩書房等が参考となる。
- (3) 小島慶三『江戸の産業ルネッサンス』中央公論社、1989年、p.193.
- (4) 山本七平『日本資本主義の精神』光文社、昭和54年、p.92.

- (5) 作道洋太郎稿「日本的経営はいかに形成されたか」の中の宮本又郎教授発言の「日本的経営論の視点」の内容を商人研究方法論に援用した。(大石慎三郎・中根千枝『前掲書』所収) pp.208-209.
- (6) 大塚久雄『社会科学の方法－ヴェーバーとマルクス－』岩波書店, 1975 年, pp. 59-60.
- (7) マックス・ウェーバー「宗教社会学論集への序文」(現代社会学体系 5『ウェーバー社会学論集』所収) 青木書店, 1971 年, pp.176-177.
- (8) 青山秀夫『マックス・ウェーバーの社会理論』岩波書店, 昭和 38 年, p.132.
- (9) 源了園『徳川思想小史』中央公論社, 昭和 53 年, pp.94-98.
- (10) 小倉榮一郎『前掲書』p.128.
- (11) 小島慶三『前掲書』pp.84-85.
- (12) 小島慶三『前掲書』p.88.
- (13) 宮本又次『大阪経済文化史談義』文献出版, 昭和 55 年版, pp.102-103.
- (14) 蔵並省自『日本近世史』三和書房, 1976 年, p.173.
- (15) 加地伸行『儒教とは何か』中央公論社, 1990 年, pp.244-246.
- (16) 蔵並省自『前掲書』p.176.
- (17) 小島慶三『前掲書』p.111.

(1991. 6. 14 2 章担当, 椎名市郎)